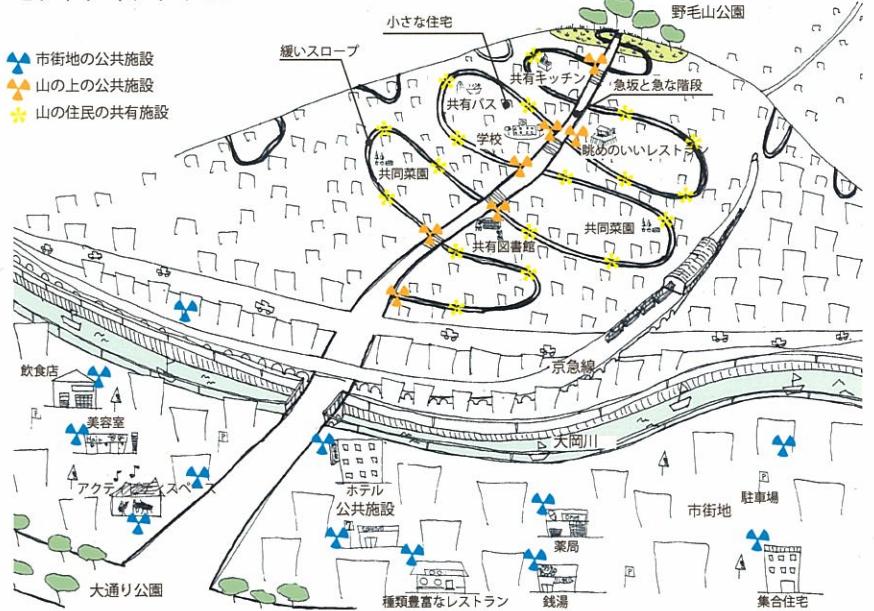




インフラを纏った家

■コンセプトダイアグラム

山の頂上、中腹、麓と市街地をつなぐスロープ群



■マスタープラン



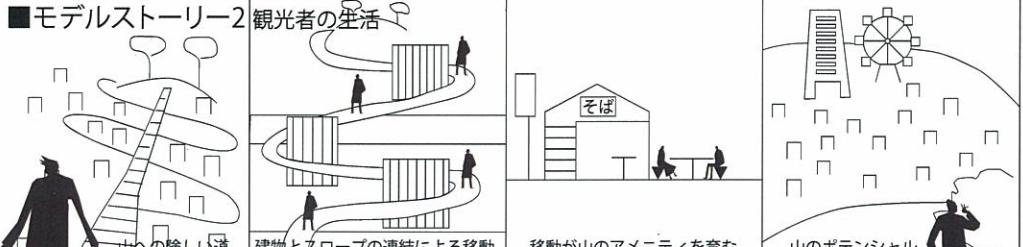
スロープによって住宅を連続的に接続し、山と街、住居と移動の関係を再構築する。

■モデルストーリー1 山の住民の生活

住民の生活



■モデルストーリー

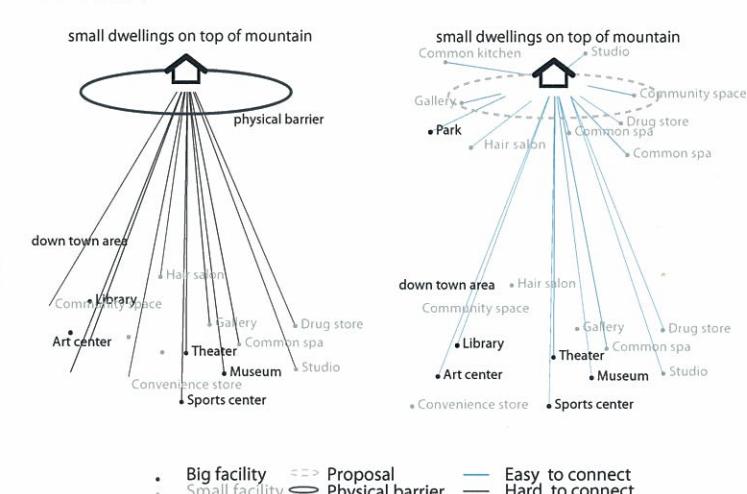


■ 地形



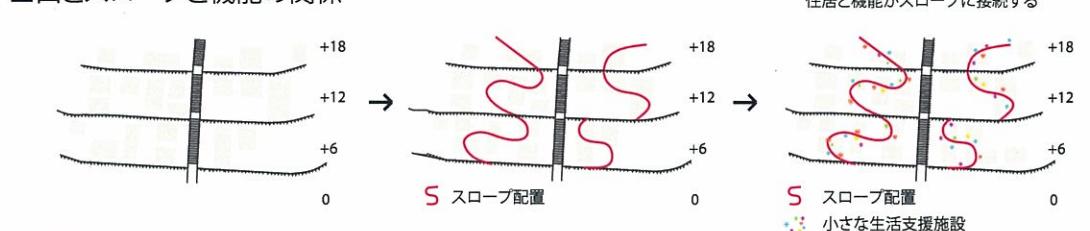
■ 崖・階段

■山の現状



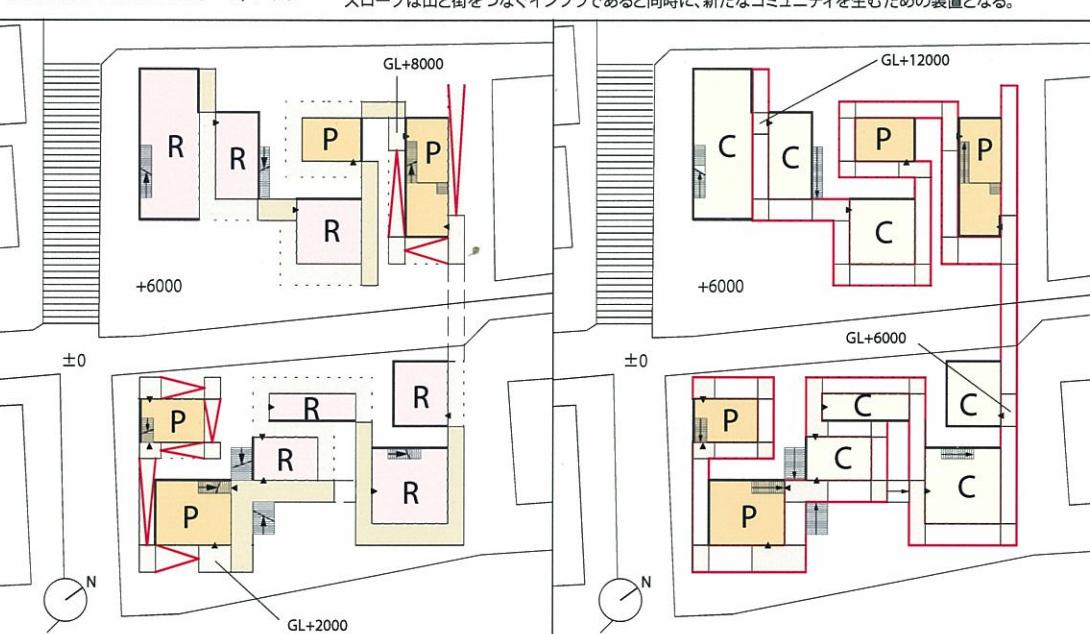
急な崖と階段が、人の移動を妨げており、山のアニメティが損なわれている。
山に住むことがアニメティとなる新たなモビリティが必要である。

■山とスロープと機能の関係

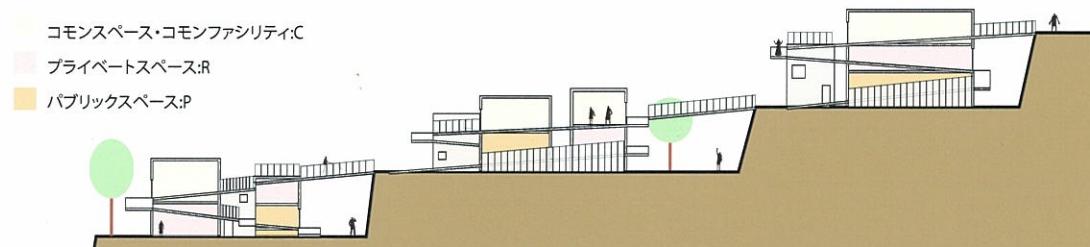


■ Plan•Section S=1/700

スロープに隣接する所にパブリックやコモンスペースを配置し、プライベートスペースをGLに配置する。スロープは山と街をつなぐインフラであるとともに、新たなコミュニティを生むための装置となる。



コモンスペース・コモンファシリティ:C
プライベートスペース:R



インフラを纏った家

私達は、未来のモビリティはただ、移動のためにつくられるのではなく、生活と密着したものになると考え、地域に根差した未来のモビリティとして、山の高低差を解消するスロープと、それに接続する小さな住宅を含んだ地域全体の計画を考えます。

私たちの提案するスロープはどんな人でも利用できるモビリティになっているのですが、そのルートの選択方法によって、さまざまな活動や建築を体験することが可能になっています。それはモビリティが小さな住宅に接続しているからこそ可能になっています。

この計画地は神奈川県横浜市西区の野毛山公園と大通り公園に囲まれた範囲です。現在横浜市西区は人口の緩やかな増加と高齢化が進んでいますが、山の頂上は市街地に比べて人口の減少と昔から住む人が多いため、高齢化が進行しており、それに加えて、山と市街地は大きな高低差によりアクセスが悪く、新たに住む若い住民が減少しています。1970年には西区人口約9万5千人に対して約8万2千人ほどが山周辺に住んでいましたが、2030年には西区の人口11万人に対して4万8千人程度の山周辺人口になるという推計（横浜市人口ニュース）です。つまり、山の頂上が市街地から切り離され孤立した存在になりつつあるということです。もともと横浜市は山が多くこのように山に取り残された町が多く存在しています。山が孤立する状態は未来の横浜にとって大きな問題ですが、一方で、山が多くあって、海や川が近いという環境は横浜の持つポテンシャルであるとも言えます。

このような状況と環境を持った山の頂上と市街地をつなげることで地域振興につながるモビリティを提案します。

山の頂上と市街地の間には50mほどの高低差があり、急な崖によって分断されています。現在はそれを急勾配の坂や、急な階段によってつないでいますが、見た目にも分かるその急さによって、山と市街地をつなぐ道は、通らざるを得ない人以外通らない道となっています。

道というのは現在までは住宅と、ある目的地をつなぐための動線としてありました。それは一住宅一家族という住宅の供給方法によって一つの住宅の中で生活が完結していたために成立していました。しかし、現代のような多様化したライフスタイル、1世帯当たり人員の減少、高齢化社会という状況を考えると、個人が所有する空間を小さくして、変化に富んだ周辺の生活支援施設や公共施設を利用しながら生活可能になっていくべきだと考えます。そうすると、移動するということが生活に直結する行為となります。道と住宅、公共スペースは切り離して考えることが出来なくなるので移動と住宅と公共スペースが一体的に計画、デザインする必要があります。住宅が最小限の機能だけを持ち、周辺を移動し、利用しながら住むというのが現代的な住み方だと考えます。

私たちが提案するスロープは、山と町をつなぐためのモビリティという意味を超えて、小さな住宅に住みながら、周辺を利用して生活するという新しい住宅のあり方、コミュニティのあり方を作り出します。

この山という環境から生まれる6m以上ある崖の高低差を緩やかなスロープでつなぐと、崖を登るための道は長くなります、その長くなった道を住宅に巻きつけるように作り、そのスロープに面して公共スペースや小さな住宅を作ります。従来の1階が店舗で2階が住宅といった、公共のインフラに対し公共性の高い空間を隣接させるようなつくり方ではなく、高さの変化に伴い公共スペースを移動できるインフラを内包した住宅群となっています。

モビリティの変化に伴って住宅も変化し、多様性を持った魅力的な街に変化します。

山の上に住むための小さな住宅の機能は、専有する住宅機能の縮小化によって生まれる小さな共有スペースや共有して利用可能な機能またはサービスです。例えば、共有キッチン、共有リビング、共有浴場などです。必要な時には街に降りて山にはないもっと大きな公共施設や大きなパブリックスペース、選択肢豊富な飲食店などの利用も容易になります。山には、周辺住民の小さな共有スペースと誰でも利用できるけれど市街地では体験できない、山という環境だからこそ共有スペースが生まれます。それは例えば、眺めのいいレストラン、南斜面を利用した菜園、ポケットパーク、気持ちの良い風が通るイベントスペースなどです。これらは山という環境でしか得られないで、市街地に住んでいる人も山に登ってくる機会が得られます。更に山の頂上には広い公園があるので、街に住む人や観光客にとって山を登るという行為そのものが市街地とは違った生活の豊かさを持っています。

このスロープは、ある範囲の全てを壊してまっさらな場所に作るのではなく、空き地や、空き家をスロープのある住宅としてつくり変えるか、人口減少に伴う世帯人員の変化によって生じた空き室をリノベーションして、既存の住宅を残しながら作ることも可能です。

この提案によって、今までの擁壁で囲われていた山の景観が、人の生活と移動の姿であふれた景観に変わります。横浜は多くの山によって形成されているので山の景観が変われば、横浜の都市全体の景観が変わります。さらに、新たな住まい方の仕組みによって山に人が住むようになれば、都市部の過密とその周辺の空洞化という問題をも解決する可能性を持ち、より豊かな都市環境、都市居住につながる提案だと考えます。